

令和二年 法話

仏教の生命観と人間の責任

…新型コロナウイルス禍を縁として考える…

中野東禅

令和二年 法話

「仏教の生命観と人間の責任」

…新型コロナウイルス禍を縁として考える…

中野東禅

表紙の「蓮」は、大伝馬町の「江戸手ぬぐい」工房「アトリエいしかわ」さんの作品です。

## 仏教の生命観と人間の責任

…新型コロナウイルス禍を縁として考える…

皆様今日は。今夏は新型コロナウイルス禍により、まことに大変なことでございます。お見舞い申し上げます。あらゆる分野での自粛で、お仕事、生活、各種の活動に支障を来されまして、重ねてお見舞い申し上げます。その上に大雨の災禍で、被災の方々にはお見舞い申し上げます。このような事態となり、お寺様のお盆などの供養も自粛を余儀なくされておられて、檀家の皆様もいつもと違った供養とお詣りの仕方になり、落ち着かないことと思えます。

### ◎法話代りの冊子配付についての「第一の提案理由」

あるお寺様から「檀家のお方が来寺され『法要の取りやめはやむ

を得ないと思うが、例年のお説教は期待していたので、法話の時にいつも配られる資料のプリントだけでもあればいただきたい』という要望がございました。

そういうわけで、もし今年の法話の資料がございましたら、それだけでも配付できたらありがたいと思いますので、頂戴できないでしょうか」というご要望でございました。

感動しました。そのお寺様には数十年お説教を担当して参りましたが、このように「仏法の学び」を身に付けておられるお方が、おいでになるということは本当に素晴らしいことでございます。それともまた先代住職様以来の「檀家様方の心の耕しの使命感」が共鳴して、仏法の学びが染み込んで座標軸になっておられるという、功德の結実だろう、と感動した次第であります。

### ◎「第二の提案理由」

それに続けて、別のお寺様から電話で「檀家様方が集まったの法

要は危ないので、法要は僧侶だけで供養しますから、各家庭毎に参詣してお焼香し、お塔婆をいただいて墓詣りをしていただくので、「法話に代わる教えを何か届けたい」という相談でありました。

そこで、第一提案の件を話しているうちに、プリントだけを進呈するので無く、法話を冊子にして、参詣の皆さんに差し上げたら銘々で読んでいただけるのではないかという、アイデアが浮かび、このような冊子の試みを思い付いたわけでございます。

どうぞ、一読してウイルスを契機に「命」や、仏教の生命観や、ご自身の生き方について、考えて頂けましたら何かのお役に立つこともあろうかと思ひ、簡単な冊子をまとめてみた次第でございます。

#### 一、ウイルスも自然・生命を支える

ウイルスも、大雨も大自然の現象です。人間はその自然の恵みと、自然の暴力とに支えられて生きているわけです。簡単に箇条書きで

説明しておきます。

#### 1、地球生態系は「生命連鎖・物質循環」で成り立つ。

そこで重要な役割を担うのが微生物（父親由来の遺伝形質を持つ胎児を、母体由来の遺伝子の拒絶反応から守る役割など）

2、人間は地球環境の中で、国家の概念、農業革命、化学薬品で生態系の枠を操作し、自然に負荷を掛け、種の絶滅や、温暖化を招きながら、科学で解決できると過信した。

ウイルスは短時間に世代交代して変異する↓文明がウイルスを助長させたのだ。

3、「生態系」は自然界の陰の主役（パートナー）なのだから、賢く共生することが必要なのだ。（これも縁起の理なのだ）ウイルスを暴走させない生態系保持によりバランスのとれた環境を。

人間の利己主義、相互不信、（人種等）差別観、排除の論理が調和の破壊をもたらしているのだ。

二、生命とブッダの縁起の真理：（禪問答）

第一の仏教生命論……長沙の景岑和尚（一八六八）に僧、問う。  
「蚯蚓（ミミズ）切れて両断となる。両頭共に動く。仏性阿那箇頭（どちら）にかある」

岑「妄想することなかれ」（観念でなく、事実のまま見たまえ）  
僧「動ずるをばいかがせん」（だって動いているじゃないですか）  
師「ただこれ、風火未だ散ぜざるなり（条件が分散し切れていないからさ）」

風・火とは次表の「地・水・火・風」の四大と「空大」の五大が生命を構成する条件であるという古代インドの生命観である。



五輪塔・板卒塔婆はこれを象徴している。  
インド医学（アーユルヴェーダ）は仏教僧と医師が協力してできた。

第二の仏教生命観……「寿・煖・識」証。

寿……同じ状態を維持する能力……遺伝子の能力。

煖……体温維持能力……消化吸収・血液循環能力。

識……自・他を識別する「白血球の能力」と神経細胞の能力。

（右脳左脳の違いを証明した角田耳鼻科医師の指摘）

◎ブッダ入滅後数百年後、医師と仏教僧は、なぜ協力し合ったのか。  
インドヒンズー教の聖性はけがれを嫌った。仏僧と医師はそれを否定した（その象徴が汚れたぼろパッチワークの袈裟を着て王宮へも行った）川で死体をさらして骨にして遺族に返すこともしていたので、母胎内胎児の成長の段階も観察し記述している。受精後数週間……アブドン（アブク状）、血肉状、四肢発生、髪の毛発生等。

出産後、嬰兒、孩兒、童兒等の分類も成立（戒名の位号）。  
（スエーデン人学者の「古代インドの苦行と癒し」太陽出版参照）。

(漢文經典では「金光明王經」に取り上げられているという)

第三の仏教生命論…存在(有)とは縁起(諸条件の調和)である。

生有しやうゆう ① 依報…特定の環境の中に生まれてくる。

本有ほんゆう ① 正報…固有の種、固有の性、個体、個性として生れる。  
② 旧業…固有の生命・生理・個性として生れる。

③ 宿業…命と心の個性潜在能力を受け継いで生まれる。

④ 共業…環境・時代・社会の特性の中に生まれる。

⑤ 三時業…個性と環境と行為の時間差影響力を受けて。

⑥ 異熟業…行為…内心…影響が変化して次の行為に。

⑦ 新業… a ① ~ ⑥ を輪廻りんねして愚かさを再生する行為。  
… b 氣付き・解脱で過去に引きずられない行為へ。

以上三種類の「仏教生命論」をふまえて、生き物の種別、同類の中での個性や才能の違い、経験による感性や好悪・コンプレックスの違いなどが生じる条件の集まり(縁起)によるわけです。それは

同時に、それらの条件を背負って「その命としての個性と責任主体」を生きているということ。しかも、個性や好悪という心理・精神活動以前に、生命活動が土台をなしているわけです。

先の禅問答に戻れば、神経細胞・筋肉等の収縮機能などが心の土台として働いているわけです。ミミズがきれて両方ともピョコピョコうごいているのは神経細胞や筋肉の収縮が完全に機能停止してないからです。つまり四大の条件が部分的に生きているから動くのです。仏教の存在論は縁起…存在とは条件の集合であるに尽きます。

その縁起性とは同時に(仏性などという觀念の)固定的何かが支配しているのでは無い、条件の調和が生命活動になっているのだから、それが分散しきれていない内は切れたミミズもピクピク動くのさ、という答えなのです。むしろそのような物質の収縮活動自体の縁起性を「仏性」と言ってもいいかもしれません。だから師は「妄想することなかれ(事実のままに見なさい)」といったのである。

### 三、「四大・命」を語った坊さん

江戸時代に所用で長期逗留する人は、長屋など貸し主の方が強く設定されています。豪潮という律師さまは、旅先で部屋を借ります。そういう時は「証文」契約書を入れます。そこで書いた「借宅証文」です。

『地・水・火・風・空の造家一軒借用申すこと実証なり。』

(大家さんが)ご入用の節にては何時にもご返済申すべく候。

さあさあ皆さん宿がへのご用心ご用心』

というのです。「宿がえ」とはあの世への宿がえのことです。

命は「地・水・火・風・空」の条件の集合で成立しているのです。その条件の調和によって生かされつつ、その命を善きものにするのが「生きるものの責任」です。

つまり、a 生命力の縁に生かされつつ、x 責任主体として生きる、その「aとx」の重なりを「仏の命」というわけです。

### 四、自然との共生を支えた「お林奉行」制度

生物学のジャレット・ダイヤモンド博士は「文明の始まり」「文明の終わり」という名著でいいます。

「文明の始まり」は『実っても落ちない麦の発見・馬の発見・車の発見』が同じ文化圏で成立したこと。「文明の終わり」は『全て水の使い過ぎ』だ。同書の最後に、希望として書き足したのが「江戸幕府のお林奉行制度」。江戸開府後大火が続き関東圏の森林伐採で水害多発し、幕府は、伐採は藩に届出し、藩は用材の特性を指導し、切った数だけ植林を義務付けた。これで里山がまもられ、自然の調和が保たれ、日本は砂糖以外の食材は自給を守った。

ここに、自然と人間の協調で命と文化が守られる智慧が指摘されているわけです。人間は自然に生かされ、自然を生かす、その中で「ありがとう」といえる命を生き切りたいものであります。

「終わり」